

本日はお忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。とかなんとかの社交辞令を述べる。～中略～

アーティストトークに先立ちまして、そもそも現代アートとはなんぞやという話をさせていただきたいと思います。世間では基本的に現代アート＝意味不明だと思われていますので、これを現代アート全般に対する理解の足がかりとしていただければ幸いです。

それで本日は資料を作って参りました。事前に配布させていただきましたが、皆様、お手元にご覧いただけますでしょうか。まあ、資料というよりは台本ですので、ほぼほぼ棒読みになるかと思われるかもしれませんが、何分赤面症の自意識過剰でございますので、ご容赦くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

現代アートの定義

なににしろ、まずは定義しないと始まりません。はい、現代アートの定義はこうです。『現代の事象を反映・表現しているもの』と言っても、ピンとこないかもしれせんから、最近読んだ書籍から、参考になりそうな一文を紹介しましょう。祥伝社新書から出ている、千住博の「芸術とは何か 千住博が答える 147の質問」からです。引用します。

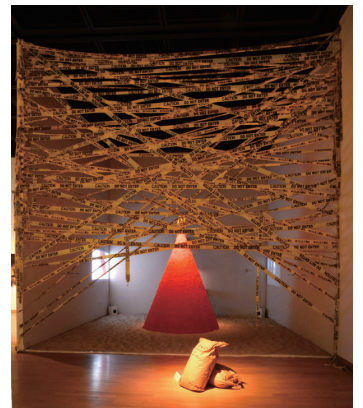
【現代に生み出される美術でも、現代の美術とは言えないものもあります。現代の人々に必要とされる内容がない作品です。これは、本人が、現代の様々な問題にちゃんと正対して直面していないことによるもの、と私は思います。～中略～ダ・ヴィンチもミケランジェロも光琳も等伯も、作品はその時代の人々にとって必要とされる提言、つまりその時代の「現代人」へのメッセージでした。】引用終わりです。

このような言説は、アート関係の本ではたびたび目にするところ。つまり、いま作ればすべてが現代アートになるというわけでは決してないということです。具体例を挙げましょう。身内の話で恐縮ですが、私の祖母がもう何十年もちぎり絵をやっておりまして、花とか山なんていうどうでもいい作品をちまちま作って玄関だとか階段だとかに気ままに飾っているのですが、この考え方でいくと、それは何百何千作ろうが、いくらうまくならうが、永遠に現代アートにはなり得ないということです。祖母自身が永遠になるほうがよっぽど早いでしょう。

逆に、これぞ現代アートと呼べるものを紹介しましょう。ご存知の方も多いかと思いますが、今年、岡本太郎現代芸術賞を受賞した、キュンチョメという方の作品です。参考画像1を御覧下さい。

5メートル四方の部屋に、事故現場で張られるようなテープでバリエードが作られています。くぐり抜けて入り込むと、砂のようなものが敷き詰められてあり、あるいは砂利の敷かれた境内を散策するような子気味よい感覚を覚えます。しかしそれはよく見るとお米なのです。それも福島のお米です。土足でお米を踏むこと、しかも福島のお米を踏ませること。この二重のタブーは、現代における最大のタブーを犯す行為といえるでしょう。

東日本大震災ありきのこの作品は、当然 2011年3月11日以前ではまったく意味を成しませんし、そもそも作品として成立しません。つまり、まさにこの現代に起こったリアルな出来事を受けて、この作品が作られたわけです。だからこそ、これは第一級の現代アートだといえるでしょう。とはいえ、批評家のお偉方が評価したからこそ受賞しているのですから、わざわざこの馬の骨ともわからない私がお墨付きを与えるまでもないのですが。



【参考画像1】

現代アートの手法

大別すると3つあります。と言っても何かの本に書いてあるわけではありません。私の感覚値で、なんとなく分類してみただけです。なんの根拠もありません。はい、一つめは「拡張・強調」、二つめは「無効果・異化」、三つ目は、「反復・パターン」です。各手法について、具体的な作家と作品をあげてご説明したいと思います。

1. 拡張・強調

まずは、参考画像2と3をご覧ください。これは説明するほどのことでもないかと思いますが、異常に大きくしたり、強調したりする手法です。ムーボヤンとセザールは、現実の子供や、親指ではありえないサイズに拡大することで、まったく別の印象を与えています。また、参考画像4のモウリタイスケの作品は石膏像を描いているのですが、実際に見ると、生身の人間の皮膚にあるようなシワが驚くべき精緻さで描き込まれています。画像ではよくわからないかもしれませんが、これは強調といえるでしょう。もちろん、石膏像にシワなどあるわけがないのですが、石膏像を穴が開くほど凝視し、リアリズムを追求して突き詰めていった結果、人間の感覚の限界点を超えて振り切ってしまったような、狂気ともいえる雰囲気醸し出されています。



【参考画像2】 Mu Boyan : 1976/ 中国



【参考画像3】 Cesar Baldaccini : 1921/ フランス



【参考画像4】 毛利太祐 : 1983/ 日本

2. 無効果・異化

参考画像 5 をご覧ください。ジェフクーンズは、普通の家庭用掃除機を、まるで数億円もする宝石か何かのように仰々しくディスプレイしています。こうすることにより、本来の掃除機としての存在意義や価値が無効化されています。これは、掃除機自体がどうかというよりも、まだ誰もスイッチを入れていない、すなわち「新品」という価値概念を崇高化して示しているのです。それは、具体的な形を持たないけれども確かに存在する、一度でもスイッチを入れると失われてしまう何かです。それはエディション(注1)にはない、絵画のオリジナル作品にあるようなアウラ(注2)を、大量生産の既製品に与えるひとつの有効な方法です。

参考画像 6 は、ダグラスゴードンの 24 時間サイコという作品です。これは、もとは 2 時間弱 (109 分) のヒッチコックのサイコという映画を、超スローモーションにして 24 時間に引き伸ばしたものです。もはや元の作品とはまったくの別物になっている。つまり異化されているということです。それはともかく、この作品をちゃんと 24 時間鑑賞した人というのは皆無なのではないでしょうか。話の筋もなにもなく、意味不明となった超スローモーションの映像を 24 時間も見続けられる人はそうは居ないでしょう。また、普通の映画のように、全部見終わったあとに初めて面白かったなどと評価を下すようなものではない。元は 2 時間くらいのサイコを 24 時間に引き伸ばす、そのコンセプトを聞いただけでもおもしろいと理解できる。これこそデュシャン以降主流となる、それまでの画風や質感を云々していた芸術とはまったく異なる、頭で作り頭で鑑賞する観念的な作品、つまりコンセプチュアルアート、ひいては現代アートの本流といえるでしょう。最後はキタノユキヒデという作家です。参考画像 7 です。この方は切り絵作家と自称しており、現代アートをやっているというわけではないようです。ただ、私としてはこれは傑作だと思いますので、異化の参考作品として取り上げさせていただきました。ファミリーマートのごく普通のレシートの印字部分を切り抜いて「領収書切っというて」とは完全に駄洒落ではありますが、この仕事の繊細さと労力を駆使したうえで、さらっと駄洒落で落とすのは、いかにもクールだと思います。



【参考画像 5】 Jeff Koons : アメリカ / 1955



【参考画像 6】 Douglas Gordon : 1966 / イギリス



【参考画像 7】 キタノユキヒデ : 日本 / 1988

※注 1 エディション

部数を限定し、版元から販売される版画のこと。

※注 2 アウラ

機械的複製によって芸術作品のコピーを大量生産することが可能になった時代において、オリジナルの作品から失われた「いま」「ここ」にのみ存在することを根拠とする権威のこと。(「artscape」Artwords 参照)

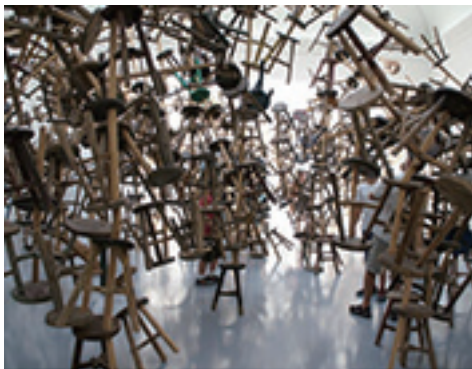
3. 反復・パターン

これは一番わかりやすい手法ではないでしょうか。どんなつまらないもので、大量に並べたりすると美的な何かが生じる。たとえば餃子をたくさん作って並べていくうちに、なんともいえない気持ちよさを感じたりするというようなことは、誰でも経験があるのではないかと思います。画像 8 をご覧ください。いくらググっても読み方が見つからなかったので、アネットサスという読み方で合っているのかわかりませんが、とにかくはこの人は、バービー人形を大量に寄せ集めて波を形づくっています。私は気持ち悪くていい作品だと思ったのですが、会田誠は Twitter でこういう同じものを大量に集めてみました的な作品はあんまり好きじゃないとか言っていました。まあ、人それぞれなのでどうでもいいです。あと、参考画像 9 と 10 のアイウェイウェイと草間彌生も見ての通り反復とパターンです。だんだん適当になってきましたが、そんな感じです。

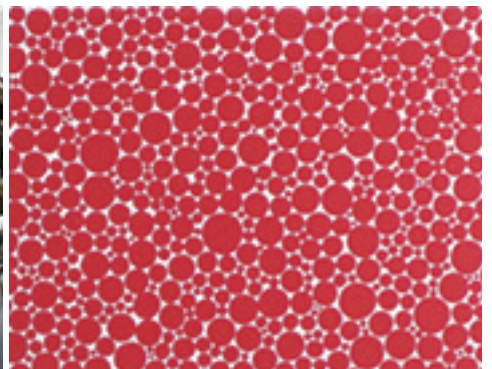
ただ、私としては草間彌生は言うなら「天然系」というジャンルでくりたいところです。山下清や棟方志功なんかと同様の分類です。なぜなら、幼少の頃より統合失調症による幻覚や幻聴があり、その脅迫観念から網目や水玉を描いている人に、コンセプトもへったくれもありません。なぜあなたはそれを描くのですか? の答えが「幻覚で見たから」というのでは、私見ではありますが、ちょっと現代アートというルールの枠を逸脱しているように思います。先にも触れましたが、現代アートというものは、基本的には頭で作り頭で鑑賞するという冷徹な頭脳によって成立するものだからです。



【参考画像 8】 Annette Thas : オーストラリア



【参考画像 9】 Ai Weiwei : 1957 / 中国



【参考画像 10】 草間彌生 : 1929 / 日本

とまあ、このように現代アートの手法は、「拡張・強調」「無効果・異化」「反復・パターン」の3つに大別できるわけです。と言っても、繰り返しますが、これは別に誰か偉い人が定義しているわけでもなんでもなく、自称芸術家の私が勝手に大別しただけですから、この分類に関する責任は一切負えませんのであしからずということをお願いいたします。

さて、すでにご満足いただけただか、もしくはこのトーク自体に飽きてきたかもしれませんが、いよいよわたしの作品についてお話ししたいと思います。先ほどの分類でいうと、私の作品は「無効化、異化」の手法になります。牛丼というごくありふれた食べ物を、滝のように構成することによって、異化しているわけです。また、牛丼の滝のコンセプトについて、もうすでにお読みになられた方も多いかと思いますが、適当に要約して読み上げたいと思います。

早くて安くて旨いというコンセプトで、サッと出てきて、チャチャッと食べる。情性的に、作業的に、あるいは単なる熱量、カロリーとして食べる。それは、味わうものではなく流し込まれると言ってもいいような食文化であり、そこには本来の「食べること＝生きること」というような生命観、あるいは倫理観は微塵もない。それは現代日本をはじめ、飽食の先進国においては至極普通のことであるが、立ち止まってよくよく考えてみると、どこかぞら恐ろしい感じがしやしないだろうか。そのような危惧と問題提起を、日本の代表的なファーストフードである牛丼に象徴させて、大衆の胃袋に無秩序に際限なく落ちていくイメージを、牛丼を落下させ”牛丼の滝”のような構成にすることで表現している。

まあ、ざっくり言うと、なんか世の中おかしくないですか、もっと食べ物を大事に食べるべきなんじゃないんですかというような、言ってみればお涙頂戴の24時間テレビみたいになかったらいい主張です。

しかし、すでに私の性格はお察しただけているかとは思いますが、私に限ってこのようなくだらぬことを思っているわけがありません。自分のこと以外はだいたいがどうでもいいんです。では、なぜこのようなコンセプトを掲げているかと言いますと、最初にお話しいたしました、現代アートの定義に則るためです。現代の問題を反映していなければ、現代アートにはなり得ないのです。ですから私は、ちょっと変わった作品を作って、そこにそれっぽいコンセプトを捏造してくっつけて、これは現代の問題を受けて作ったアートで、だからしっかり現代アートになってるんでそこんところよろしくと、そういうわけです。

もし本当に私のコンセプトにあるようないささか青くさい疑問、または危機感でもあるのならば、いっそ活動家にでもなるべきだと私は思います。たとえば悪名高いシーシェパードのほうが、世の中を変えるという意志や行動のエネルギーの使い方としては、よほどまともなやり方ではないでしょうか。

と、一気にここまでしゃべり続けましたが、本来、この場は対談形式ということで打ち合わせしておりますので、遅ればせながら、ようやくここから対談ということで進めさせていただいてもよろしいでしょうか。はなはだ身勝手に申し訳ありませんが、よろしくをお願いいたします。

※棒読みではない対談につづく、予定